



改めて本学科が進めてきた教育・研究を振り返る機会が増えましたが、2006年から先進的にアグリビジネスという旗印のもと、自然科学系と社会科学系の教員が融合したプロジェクト構成から、より専門性を高めるプロジェクト構成、そして、2017年には新しいプロジェクト名称へと変革しましたが、開学当初から

の理念である日本や秋田県の農と食のより豊かな発展に貢献ということは、色あせることなく継続していると感じています。開学時には理系なのか？文系なのか？とか、アグリビジネスってどんな研究するのかなど質問されていましたが、いまやグローバルにアグリビジネスという言葉は定着しています。他大学でもアグリビジネスやそれに類する言葉の学科や大学も増え、他大学との差別化や近年の日本の受験生減少の対応に迫られておりますが、現状は高い志願者を維持できております。これも、本学科を卒業した600名を超す同窓生が、多くの分野で中心的な役割を担い、活躍しているおかげなのかと考えており、感謝申し上げます。

足もとの農業に目を向けると、2025年は、「令和のコメ騒動」から日本の農業が抱える問題を改めて浮き彫りにした年であった

アグリビジネス学科同窓生の皆さま、いかがお過ごしでしょうか？きつと充実した毎日を送っているものと思います。2025年4月より学科長を拝命いたしました、吉田康徳です。これまで現場にいることが多く、圃場の正装と私が呼んでいる作業着と長靴を身に付け、帽子とタオルを相棒に、温室や圃場で植物の「声」を聞き分けながら、駆け

け回っておりまして。しかし、今回、巡り合わせもあり学科長の大役を任ざれております。そのため、これまでと違い学科に関する対外的な対応に振り回されております。でも、ありがたいことに、大潟キャンパスの教員や事務職員の皆さん、そしてもちろん、AICの方々や学生からの温かい支援を受けながらなんとか乗り切っているところです。

の理念である日本や秋田県の農と食のより豊かな発展に貢献ということは、色あせることなく継続していると感じています。開学時には理系なのか？文系なのか？とか、アグリビジネスってどんな研究するのかなど質問されていましたが、いまやグローバルにアグリビジネスという言葉は定着しています。他大学でもアグリビジネスやそれに類する言葉の学科や大学も増え、他大学との差別化や近年の日本の受験生減少の対応に迫られておりますが、現状は高い志願者を維持できております。これも、本学科を卒業した600名を超す同窓生が、多くの分野で中心的な役割を担い、活躍しているおかげなのかと考えており、感謝申し上げます。

そのような背景もあり、本学科も、立ち止まるのではなくさらに進む必要に迫られております。つまり、アグリビジネス学科のNext Stageを切り拓く取り組みが必要となっております。秋田県立大学も2027年4月に新しい大学院として「未来グリーン・デジタルサイエンス学環」という、生物資源科学研究科とシステム科学技術研究科が連携して、分野

横断的な教育・研究として、農業・生物資源科学と情報・工学の専門知識を組み合わせ、地域課題の解決を目指し、秋田県の産業振興や、持続可能な社会形成(ゼロカーボン、カーボンニュートラル)に貢献する人材を育成することを予定しています。アグリビジネス学科でも、それに対応した人材育成は、本学科のNext Stageにつながる部分も多いかと考えておりますので、さらなる、バージョンアップしたアグリビジネスを期待してもらいたいと思います。

最後に、学科内の近況を少しお伝えします。コロナ禍においては、大学生活も様々な制約を受けておりましたが、ようやく活気を取り戻してまいりました。私自身の考えでは、「学科の活力は、学生の活力」、つまり、学生一人ひとりの活気こそが、学科を突き動かす源泉と考えています。制限も少なくなったことを受け、コロナ禍で中止になっていた「プロジェクト対抗ソフトボール大会」の復活を3年生にお願いし、無事に8月9日に開催し、たくさんのお学生が参加してくれました。優勝は畜産プロですが、全員が協力し合う楽しい催しでした。それ以外でも、1年生の皆さんのご尽力により、松風祭では、アグリカフェも復活しております。このように在学生も活気ある活動をしております。卒業生の皆さんにおかれましても、後輩達に負けない「先輩達の底力」を、ぜひ見せていただきたいと期待しております。

10期生の大西将嵩と申します。この度、同窓新聞への執筆の機会をいただき、ありがとうございます。私は在学時、次世代農業基盤創成プロジェクトに所属しておりました。当時のことを振り返ると、三年次に行ったトミヨ属の生息環境調査や、ほ場のインテークレート試験、水準測量の実習等が思い浮かびます。

10期 次世代農業基盤創成プロジェクト 大西 将嵩 (現在 秋田県庁)

さて、卒業後の近況報告ですが、私は現在、秋田県庁に「農業農村工学職」で勤務しております。この仕事は「秋田県の農業基盤をどうしていくか」を考え、形にする役割を担っています。具体的には農業水利施設や農地の整備・維持管理の計画立案、工事の発注と監督、地元調整、農地災害への対応、農村振興のため

最後にありますが、職場にはプロジェクトの卒業生が多いだけでなく、「農業職」で採用になったアグリビジネス学科の卒業生と一緒に仕事をすることも多々あります。また、学会等のイベントや県の委員会等で大学の先生方とご一緒することもあり、ご縁を感じています。アグリビジネス学科を通してできたこれらの繋がりを大切に、これからも秋田の農業に貢献できるように頑張ります。

*次号では園芸プロとビジネスプロの卒業生から近況報告をしていただく予定です。

アグリビジネス学科のNext Stageを切り拓く

アグリビジネス学科長 吉田 康徳

アグリビジネス学科同窓新聞

-発行- 秋田県南秋田郡大潟村字南2-2 秋田県立大学生物資源科学部 アグリビジネス学科 TEL 0185-45-2026(代) 印刷: 株式会社 八郎印刷 TEL 018-875-4005

16期生の懸田拓馬と申します。卒業後、社会に出て一年も経っていない新米社会人ですが、同窓新聞に寄稿させていただく貴重な機会を得ることができましたので近況を報告させていただきます。

16期 先進作物生産技術開発プロジェクト 懸田 拓馬 (現在 岩手県庁)

卒業後は岩手県庁に入庁し、県北地域で野菜の生産振興に向けて技術指導や情報発信といった普及業務を行っています。プロジェクトで専攻した米穀類の担当ではありませんが、支援する生産者の中には水稲や畑

作物との複合経営で野菜を栽培されている方もいるため、プロジェクトで学んだことを活かしながら仕事をすることができています。ただ、担当である野菜についてわからないことが多くあるため、日々勉強をしながら仕事に臨んでいます。今後は野菜だけではなく、最新の技術や農業情勢についても勉強を重ねて、広い視野を持てるように成長していきたいと思っております。

同窓生からの近況報告

今回は作物プロと基盤プロの卒業生に近況報告をしていただきました。

在学生からの近況報告

アグリカフェ復活!



1年 齋藤 丈 (20期)

本学アグリビジネス学科1年生は、2025年11月1日から2日にかけて開催された松風祭において、カフェ企画「アグリカフェ」を実施いたしました。アグリカフェはコロナ禍以前まで本学科1年生によって行われていた企画であり、今回はコロナ禍が明けてから初めての開催となりました。

当日は、シフォンケーキ及び各種ドリンクの販売を行いました。シフォンケーキにつきましては、大潟村で営業されている野の花シフォンケーキ様にご協力いただき、地域で長く親しまれ、地元根付いた商品を提供することができました。その結果、多くの方々にご来店いただき、用意した商品は両日共に完売となりました。

本企画を通して、企画内容を形にしていく大変さや、店舗における事前準備の重要性に加え、当日の運営における判断の難しさを実感いたしました。また、多くの方々の支えがあったからこそ活動が成り立っていることを、改めて感じる機会となりました。今回の経験を今後の活動に活かしていきたいと考えております。

最後になりましたが、本アグリカフェの開催にあたりご協力いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございます。



販売したシフォンケーキ



控室での準備の様子

各プロジェクトの近況

2025年12月現在

先進作物生産技術開発プロジェクト

(旧大規模農業経営プロジェクト)

作物プロは、3年生10名、4年生8名で、12月には2年間の海外農業研修を終えたWさんが米国から無事に帰国し、元気な顔を見せてくれました。教員は、露崎先生、水澤先生、保田先生、山本の4名で、AICの西村先生も相変わらずです。7月に実施した1泊2日の地域農業研修もコロナ前に

戻り、学生は大部屋で大いに親睦を深めました。北上市の大規模生産法人を見学し、スマート農業の最前線について学んだ後、宮沢賢治記念館にて農学と文学を愛した彼の作品に触れ、サウイフモノニワタシハナリタイと思えました。卒業研究では、基本的な水稲、畑作、機械・情報に関するも

先進園芸技術開発プロジェクト

(旧園芸作経営プロジェクト)

お元気ですか? 2025年度の園芸プロは、教員4人、研究員1人、大学院生3人、4年生7人、3年生7人の計22人です。大学院生が増え、ゼミで鋭い質問が増えました。さて、私が独断と偏見で選ぶ園芸プロのニュースは2つです。1つは、松風祭の会計を紙伝票からiPadのアプリに変更したこと。毎年、お

つりの計算や集計に手間取っていましたが、iPadを3台投入したことで、だいぶスムーズになりました。最近では、開店の1時間以上も前から行列が多くなるほど農産物販売は好評を得ています。お客様に気持ちよく購入してもらうために、「課題発見・解決」のサイクルをこれからも回していきたいものです。2つ目は、

家畜資源利用推進プロジェクト

(旧家畜資源循環農業経営プロジェクト)

今年度はアグリイノベーション教育研究センターの渡邊が担当します。2025年度の畜産プロジェクトは教員4名(横尾先生、佐藤先生、山中先生、渡邊)と、大学院生(修士)2名、4年生7名、3年生8名で活動してきました。2024年度、畜産プロジェクトの短角牛ブランド「がたべこ」がデビュー

し、2025年度はその認知度をアップに向けて、3年生を中心としてイベントでのPR活動を頑張ってきました。特に10月に参加したABSまつりでは多くの人に手に取ってもらい「赤身肉」のおいしさを伝えることができたと思います。現在、同窓生の皆さんにも懐かしいサンルラル大潟のレストランでは数量限定で

次世代農業基盤創成プロジェクト

(旧生産環境プロジェクト)

2025年度の次世代農業基盤創成プロジェクトは、近藤正先生、永吉の2名体制で運営しております。学部・学科の教育と研究に7年間ご尽力された増本隆夫先生は、定年により2025年3月に退職されましたが、同年8月に本学の名誉教授号が授与されました。増本先生とはたまにお会いする機会がございますが、大変お元気そうで、これまで以上に研究活動に邁進されている様子です。

現在、プロジェクトに所属する学部生および院生は、3年生8名、4年生6名、博士前期1年生1名、博士前期2年生1名、博士後期2年生1名の大所帯です。卒業・修了予定の4年生6名と博士前期2年生1名は全員進路が決まりました。内訳は、大学院進学1名、国家公務員1名、地方公務員3名、農業関連の民間企業1名、自営(農業)1名です。

さて、本プロジェクトのメンバーが関係する大きなイベントとして、2025年11月6日、7日に農業農村工学会東北支部大会が秋田市で開催され、同学会の会員である重岡徹先生、近藤先生、永吉の3教員とプロジェクトに所属する3

4年生は、支部事務局を務める弘前大学や秋田県庁の方々とともに大会の運営・実行に携わりました。大会初日は上田賢悦先生に基調講演の講師を、最終日には重岡先生に秋田県の農業・農村の未来について討論するパネルディスカッションのコーディネーターを、それぞれご担当いただきました。また、研究発表会では本プロジェクトの教員が指導する大学院生が口頭発表に臨み、会場からの質疑にも熱心に応えていました。

地域ビジネス革新プロジェクト

(旧アグリビジネス・スマネジメントプロジェクト)

今年度は重岡がプロジェクト近況報告します。2025年3月に末永先生が島根大学に移籍されました。また酒井先生は4月から9月まで介護休職されたので、プロジェクトは林先生と私の2人体制(10月からは酒井先生は復帰されました)でのスクランブル運営となりました。2025年度の学生は3年生が6名、4年生が6名の合計12

名で日々研鑽しています。4年生は卒業論文作成に苦闘中ですが、テーマは流通学分野2人と社会学分野4人に分かれて取り組むなどアカデミック色の強い力作が揃いそうです。3年生のプロジェクト活動は、2025年度から現場が抱える課題解決を目指す「キャップストーンプロジェクト」として、経営学チームと社会学チームに分かれて

政策・経営マネジメントプロジェクト

(旧農業政策研究プロジェクト)

皆さん、こんにちは。政策プロ・助教の高津です。2025年度の政策・経営マネジメントプロジェクトは、3年生8名、4年生7名、大学院生4名に加え、岡田教授、上田教授、濱村准教授、私の計23名で活動しています(教員の異動はありません)。

①3年生のプロジェクト活動に「キャップストーン」プログラムを導入しました。これは自治体や企業等と連携した社会課題の解決に向けた調査・研究を実施し、その成果を発表する実践型教育です。2025年度は美郷町と協定を結び、薬用作物の振興や集落営農の担い手問題に取り組んでいます。②京都大学農学部・松

下秀介教授の研究室とのコラボゼミを開催しました。秋田県とは異なる京都の農業に触れるとともに、京大生との研究報告会を通じて、学生も教員も大きな刺激を受けました。最後にになりましたが、2026年3月をもって、岡田直樹教授が定年退職を迎えられます。これまでの多大なご功績に深く感謝申し上げますとともに、その志を継ぎ、秋田の農村地域の課題解決に向けて教育・研究になお一層励んでまいります。高津 英俊記